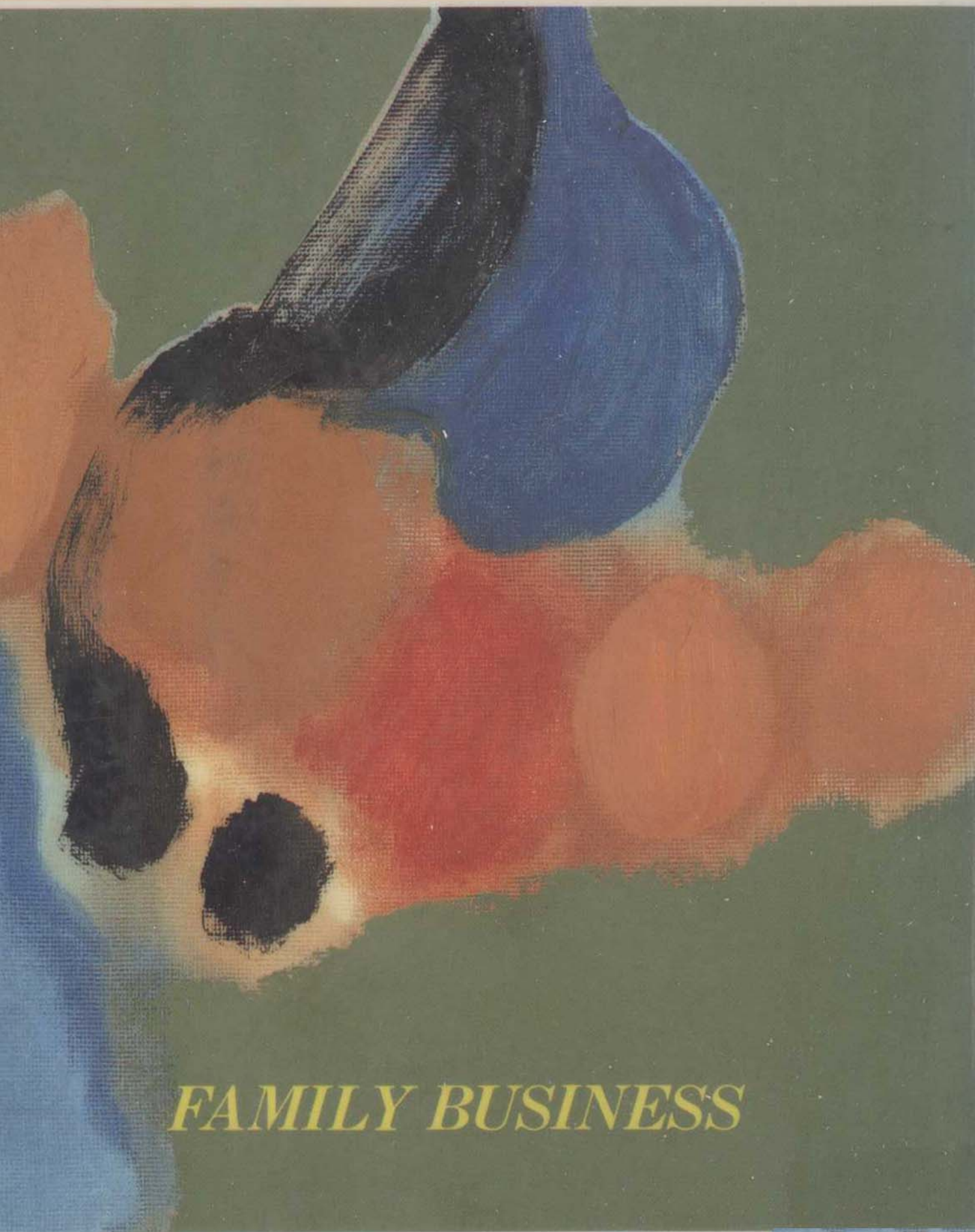


探偵家族

マイクル・Z・リュースン 田口俊樹訳

1655



FAMILY BUSINESS

A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

探偵家族

マイクル・Z・リュースン 田口俊樹訳

1655



院图书馆
章

FAMILY BUSINESS

A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

ヤカワ・ミステリ

001655-0 C0297 ¥1000E

ルンギ探偵事務所が、大小どんな事件も承ります。



マイクル・Z・リュース

©Kate Butler
©Hayakawa Publishing, Inc.

風光明媚な歴史の町バースに住むルンギ一家は、親子三代にわたって探偵事務所を営む“探偵家族”。戦後、裸一貫から事務所をおこした親爺さん、優しいママ、放蕩息子の長男サルヴァトーレ、妻のジーナと事務所を切り回す次男アンジェロ、経理担当の長女ロゼッタ、そしてやんちゃ盛りの二人の孫だって立派なメンバーだ。そんな彼らのもとへ、ある日近所の主婦がやってきて台所の洗剤がいつもの場所とずれているので調べてくれという。雲をつかむような依頼は、やがて思いもよらぬ展開を……ハードボイルドの巨匠が贈る、ユーモラスな新シリーズ



9784150016555



1920297010003

〈著者紹介〉 1942年マサチューセッツ州生まれ。私立探偵サムスンもの、パウダー警部補もので絶大な人気を誇り、近年はホームレスを主人公としたシリーズで知られる。イギリス在住。

1000円+税)

C.

田 口 俊 樹
た ぐち とし き

この本の型は、縦18.4センチ、横10.6センチのポケット・ブック判です。

1950年生 早稲田大学文学部卒

英米文学翻訳家

訳書

『刑事の誇り』マイクル・Z・リュース

『氷の男』フィリップ・マーゴリン

(以上早川書房刊) 他多数

検 印
廃 止

たんていかぞく
〔探偵家族〕

1997年10月10日印刷

1997年10月15日発行

著 者	マイクル・Z・リュース
訳 者	田 口 俊 樹
発 行 者	早 川 浩
印 刷 所	星野精版印刷株式会社
表紙印刷	大平舎美術印刷
製 本 所	株式会社川島製本所

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2ノ2

電話 03-3252-3111 (大代表)

振替 00160-3-47799

〔乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい〕
〔送料小社負担にてお取りかえいたします〕

ISBN4-15-001655-0 C0297

Printed and bound in Japan

MICHAEL Z. LEWIN

探偵家族

FAMILY BUSINESS

マイクル・Z・リュース



A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

探偵家族

登場人物

ルンギ家の人々

親爺さん……………ルンギ探偵事務所の創設者

ママ……………親爺さんの妻

サルヴァトーレ……………長男。画家

アンジェロ……………次男

ジーナ……………アンジェロの妻

ロゼッタ（ローズ）……………長女。経理担当

デイヴィッド } ……アンジェロの子供
マリー }

ジャック・シェイラー……………会計事務所の事務員

アイリーン・シェイラー……………ジャックの妻

ガイ・イングリッシュ……………会計士

キット・ブリッジス……………ファッション・モデル

マフィン・メッケル……………サルヴァトーレのガールフレンド

ウォルター……………事務弁護士。ロゼッタの婚約者

エイドリアン・ボイリング……………セールスマン

イグナシアス・ホワイト……………ボイリングの部下

ボニー……………酒場の常連客

ハワード・アーコット……………印刷屋の従業員

シリル・ヤンガー……………印刷屋の経営者

チャーリー・スタイルズ } ……警官
ロジャー・ヴァーデン }

アンジェロが心配事を胸に抱えたまま家族の食卓——それも朝食の食卓——につくというのは、めったにないことだった。が、彼のその心配が取り越し苦労でなかったことは、ロゼッタが戸口に現われたところで、もはや疑う余地のないものとなった。彼女の眼を見ればそれは明らかだった。

それまではいつもの朝食風景だった。いや、そうだろうか。デイヴィッドとマリーが、学校の鞆と教科書と宿題をひつつかんで飛び出していくかわりに、テーブルについているというのは、それほど頻繁にあることだろうか。ママと親爺さんオールド・マンが階下したに降りてきてみんなに加わるというのも。

今日はたまたま偶然が重なったのか、それとも、アンジェロとロゼッタ——兄と妹とのあいだに起ころうとしていることがなんであれ、誰もがその目撃者となろうとしたのだろうか。

「ロゼッタがバスルームにいるみたいね」とまずジーナが、賢い妻なら誰でもするように、迫りくる危機を夫に知らせた。

「おれはもう行かなきゃ」とアンジェロは言った。

これはふたつの世代の大人には、軽いジョークとして聞こえる返答だった。デイヴィッドとマリーには、自分たちの父親がさらにもう一枚トーストに手を伸ばすまで、それがジョークとはわからなかった。

ジーナがアンジェロに蜂蜜を渡した。

「ありがとう」

「どうしたんだよ、パパ」とデイヴィッドが言った。「水族館じゃもつとひどいことが起こってるんだから」

親爺さんが怪訝な顔で尋ねた。「水族館で何があったんだ？」誰も答えないので、彼は孫に向かって訊き返した。

「水族館で何があつたんだ、デイヴィッド？」

デイヴィッドは、もちろんただナンセンスなジョークを言っただけだったので、ロゼッタ叔母さんの登場に救われる恰好になった。

ロゼッタ叔母さんはきつと見開いた眼で兄をじつと見据えていた。「それで？」とその眼は言っていた。眼だけでなく口も言った。「それで？」

「坐つて早く食べなさい、ローズ」とママが娘に言った。

二十九歳の娘、ロゼッタはおとなしく自分の椅子に坐つた。しかし兄を睨んだ目的を忘れたわけではなかった。彼女は言った。「お腹はすいてないわ、ママ。わたしはアンジェロのことばを聞きたいの。兄さんにも一晩考える時間があつたんだから」

絶対にそうなると予測したとおり、アンジェロはみんなの視線が自分に集まるのを感じた。ナイフを取り上げ、蜂蜜をトーストに塗り直し、空咳をしてから彼は言った。

「いいかい、ローズ、おれは思うんだが——いや、おまえの言いたいことはすべてわかつてるつもりだよ。嘘じゃない。

い。ゆうべももう一度最初から考え直してみた」

「それでも反対なのね」とロゼッタは言った。

「そうだ」言えた。いや、言つてしまった。アンジェロは両手を顔のまえに上げて防御姿勢を取った。誰も笑わなかった。ロゼッタの眼は、朝食の皿越しに兄に向かって叫んでいた。

「悪いけど」とアンジェロは言った。そして、音節ごとにテーブルをこつこつと叩きながら続けた。「でも、そんなふうに変えることがおれにはいいことには思えない。よさそうな感じがしないんだよ」

「変更なし、とこいつは言つとるのか？」と親爺さんが言った。「わしが引退したとき、オフィスのドアの注意書きを早々と書き換えずにはすまなかつた男とこいつとは、ほんとに同一人物なんだろうか。待つということができない男なのに」

「父さん、あれとこれとは話がちがうよ」とアンジェロは言った。

「もちろん、ちがうとも。神よ、理に適つたわしのことば

からどうかわれわれを守りたまえ、だ、はっ！」

「今朝は具合はどう、おじいちゃん？」とマリーが尋ねた。「風邪はよくなった？」

親爺さんの額に刻まれた深い皺が虹の形になった。彼はマリーのほうを向いて答えた。「風邪はだいぶよくなったが、よく眠れなくてな。この歳になると……」

「シリアルを食べて」とママが親爺さんに言った。「事務弁護士のところでお腹をすかしてなんかいたくないでしょ？ 弁護士さんは食べものを出したりしてはくれないんだから」

「食べてるよ、食べてるじゃないか」と親爺さんは言ってスプーンを取り上げた。

「ということは、父さんは今日は弁護士と会うんだ」新たな話題が見えてくるかもしれない「窓口」を探していたアンジェロが言った。

「父さんが理性を取り戻さないかぎり」とママ。

「遺言のことで相談にいくのさ」と親爺さんは言った。

「母さんがわしの金を欲しがってるもんでね、ちゃんと書

類にした形で」

「ほんとうにそんなふうに思ってたらしやるのなら……」とママは言いかけた。

ロゼッタがテーブルを叩いてそのことばをさえぎった。「話題を変えないで！」ルンギ家の食卓でロゼッタが声を荒らげるというのは、きわめて珍しいことだった。テーブルを叩くなどというのはこれまでに一度もなかったことだ。アンジェロはまるで平手打ちでも食らったみたいになんて個人的に受け止めた。全員の視線がロゼッタに集まった。ロゼッタの眼は兄に釘づけにされていた。彼女は言った。「ほんとの理由はそれがわたしの考えだからなのよ。兄さんが考えたことだったなら、何も問題はないのよ。パパが言ったことはまちがってないわ。パパは正しいことを言ったのよ」

「おや、急に私は正しくなったぞ」と親爺さん。「これで心おだやかに死ねる」

「そんなんじゃないよ、ローズ」とアンジェロは言った。

「だったら、なんなの？」

アンジェロは手のひらを上に向け、感情を正確に表現できることばを探した。「うちは……われわれがやってるのは……」そう言つてテーブルを囲む顔と顔、異なる世代と世代を見まわした。「ファミリー・ビジネスだ。街角の店舗みたいな和やかな雰囲気だね。それがそもそも父さんがこの仕事を始めたやり方だった。それは昔からずっと変わらない。うちのサーヴィスはあくまで個人的なものだ。客が来れば、お茶をいれて、天気の話なんかして、相手が切り出すまでは仕事の話はしない。でも、相手が話しはじめ、それがわれわれにできることなら、相手が満足できるように取り計らう。われわれは働き、相手は金を払う。それがうちのやり方だ。それが誰もがそう思つてるうちのやり方なんだよ」

アンジェロはそこでことばを切った。しかし、ロゼッタの毅然たる表情は無言の異を唱えていた。アンジェロは言つた。「ファックスのときもおれはイエスと言つた、だろ？ コピー機のと きにも。おまえの經理の仕事にコンピューターを入れたときも、もちろんイエスだった。それは

理に適つてると思つたからだ。だから何も問題はなかつた。でも、どこにもかしこにもコンピューターを導入する？ 大きなコンピューターの眼がそこらじゅうでちかちか光つてる？ 依頼人と話し合うオフィスでも。それだと、われわれのやり方を根本から変えることになる。われわれの商売そのものを変えてしまうことになる。それはまちがつてる。よくないことだよ」

「わたしのコンピューターはとてものろいの」とロゼッタは言つた。「効率が全然よくないのよ。時間の無駄以外の何物でもないの。わたしの時間のね」

「だったら、新しいのを買えばいい。それは全然かまわない」とアンジェロは言つた。「超特急みたいなコンピューターを買えばいい」

「中途半端だとまるで意味がないのよ」とロゼッタは慎重にことばを選んで言つた。「どうしてわたしは手書きの調査記録を見るために、わざわざオフィスまで行かなきゃいけないの？ 兄さんは兄さんで、送り状を取りにきたり、伝言を伝えたりするだけのことなのに、どうしてわたしの

部屋まで来なくちゃならないのか。わたしたちはもっと効率的にならなくちゃ駄目よ。互いにつながってる端末コンピューターを持たなくちゃ。現代的な、完全なコンピューター・システムを導入しなくちゃ駄目よ」

「それはどこまで行くんだね？」とアンジェロは言い返した。「キッチンにもコンピューター、バスルームにもコンピューターってところまでか。ダイニングルームのサイドボードの上にもコンピューターってことになれば、食事中に仕事の話をしてても、おまえは椅子に坐ったまま調査記録に「アクセス」できるってわけだ」

「茶化さないで」とロゼッタは言った。

「茶化してなんかいないよ」

ロゼッタは兄を睨みつけた。アンジェロはおもむろにトーストを食べはじめた。

ルンギ家には平和主義者——家族の潤滑油的存在がふたりいた。アンジェロにもロゼッタにもはや互いに譲歩するつもりのないことが明らかになると、そのうちのひとり、ママがもうひとりの平和主義者に発言を求めて言った。

「ジーナ、依頼人にはあなたも会うわけだけど、あなたはどう思う？」

アンジェロもロゼッタもジーナを見やった。ジーナは指先で唇を撫でながらしばらく考えてから言った。「ロゼッタが要ると言えば、やはり要るんだとわたしは思うけど」兄嫁のなんとも明快な支援に驚きながらもロゼッタが言った。「信頼の清き一票、心から感謝するわ、ジーナ」ママが言った。「わかった。じゃ、それでいいわね」そう言っただけで息子を見やった。

妻と母の意外な態度にアンジェロはただ肩をすくめた。黙諾というやつだ。

これで一件落着。

発言してもよさそうな頃合いと見て、マリーが言った。「わたしはコンピューターなんて気持ち悪いけど」そう言うだけで立ち上がり、鞆を探した。

しばらくぼうっとしていた親爺さんがママに尋ねた。「弁護士とは何時の約束だったかな？」

マリーの弟、デイヴィッドもそれまでいっさい会話に加

わろうとはしなかった。が、だからと言ってその沈黙は、彼の無関心を意味しているわけではなかった。デイヴィッドにとって、家庭から何メガバイトものコンピューターやマウスやモデムを使つて、コンピューター・ネットワークにアクセスできるというのは、まさに地上の楽園を意味していた。

だから、このなりゆきを実は内心はらはらして見守つており、ロゼッタ叔母さんが提唱する約束の地に父親が反対したときには、おおいに落胆し、思いがけず母親が父親に反旗を翻したときには、不可知の祈りをまた改めて信じる気持ちになっていた。そして最後に決着がつくと、そこで初めて感情を表した。宙に拳を突き上げて叫んだ。「やった！」

九時、アンジェロとジーナはいつものようにオフィスに行つた。朝食のあと初めてふたりになり、ジーナがさき口を開いた。「そうむくれないでよ」

アンジェロは机に向かうと、手をこすり合わせた。そし

てため息をついた。引出しを開けて鉛筆とノートを取り出し、鉛筆を撫で、ノートも撫でた。それからジーナが自分のほうを見ているかと思ひ、顔を上げた。見ていなかった。「むくれてなんかいないよ」と彼は言った。

ジーナは通りに面した窓の敷居に置かれた鉢植えの土をつついていた。水をやる必要はなさそうだった。それはすぐにわかつた。が、アンジェロが不満の意を表明することばを探すあいだ、鉢植えに水をやることを彼女は場つなぎに利用した。

「ただ驚いたただけだ。それだけだ」とアンジェロは言った。

ジーナは夫のほうを向いて言った。「誰に？」

そんなことは訊かれるまでもないと思つていたので、アンジェロはいささか驚きながら答えた。「もちろんきみにだ」

「わたしに？」

「きみはためらいもしなかった。どちらかと言えば」なんてことばもなかった。きみはただ「わたしはこう思う」ときっぱり言った」

「でも、あなたは、ほんとうはロゼッタに驚くべきなんじゃない？」

アンジェロはジーナのそのことばを少し考えてみたが、何を言わんとしているのかすぐにはわからなかった。「どういう意味だね、それは？」

「あなたがウォルターに最後に会ったのはいつ？」

アンジェロはさらにわけがわからなくなった。「ウォルター？　なんでウォルターが出てくるんだ？」

ジーナはそれには答えず、いい匂いのするテングクアオイの葉に溜まった埃をただ払った。

アンジェロは自分だけ知らないことがあるのかとまた考えた。ウォルターは妻帯者ながら、ロゼッタの長年の「ボーイ」フレンドだ。しかし……。「ウォルターは今こっちはいないんだと思ってたけど」とアンジェロは言った。その理由までは思い出せなかった。「仕事で、だっけ？」

「もう三週間になるわ」

「仕事ならそれくらい長さにもなるだろう」

「ロゼッタはそのことをとても怒ってる」

「ほんとに？」アンジェロはまた記憶を探ってみた。が、何も出てこなかった。「ウォルターは女房のもとに帰っちゃったかなんかしたのか？」

「それはわからない」とジーナは言った。「彼女、何も話してくれないから」

そこでふたりは互いに顔を見合わせた。ロゼッタがウォルターのことを始終ジーナに話していることは、アンジェロもよく知っていたが、それでも不可解なことに変わりはなかった。「でも、なんで新しいコンピューターの話にウォルターが出てくるんだね？」

「あなたは彼女に譲歩しようとした」とジーナは言った。「必要なら彼女が使ってるコンピューターは買い換えてもいいって言った」

「でも、あいつはそれを断わった」アンジェロにもだんだん話の方向が見えてきた。ほんとうの問題はコンピューターではなかったのだ。彼は少し気分がよくなった。

「そう」とジーナは言った。「コンピューターを新しくすることは、なんらかの理由で彼女にとってとても大切なこ

となのよ。テーブルを叩くぐらい」

「なんらかの理由と言うと？」

「わからない。でも、彼女の言うとおりにしたらってわたしが言ったのはそのためよ」

「なんであいつが欲しがってるのかわからないから？」

「そう」

「なるほど」

「それにあなたの机の上にコンピューターがのつていても、わたしたちはこれまでどおり鉢植えのそばでも人と話ができるんだから」

アンジェロは通りが眺められる窓辺に置かれた、坐り心地のいい応接セットを見た。

「実際、彼女の言うとおり、コンピューターを導入すればコストの削減にもなるんじゃない？ 長い眼で見れば」

アンジェロは納得したわけではなかったが、とりあえず妥協して肩をすくめた。そこでオフィスへ上がる階段のドアが開いた音が階下から聞こえた。ジーナが言った。「幸運の女神がドアをノックしたのかも」

階段を上がってくる足音がした。さほど大きな音ではなかった。アンジェロが言った。「女だな。体重は七ストーン半（約四十キロ）。靴のサイズは4。左利きで、最近コペンハーゲンから帰ってきた。きみはどう思う？」

普段はただ笑みを浮かべるだけなのだが、今日はジーナは声をあげて笑った。

アンジェロは鉛筆とノートを机の上に並べた。それから、そこに画面をちかちか光らせてコンピューターがでんと居坐っているさまを思い描いた。彼は首を振り、湯を沸かし、紅茶をいれようと立ち上がった。

新たな依頼人は確かに小柄な女性だった。しかし、さすがのシャーロック・ルンギも、彼女が印象的な茶色の眼をしており、歳は三十代半ばで、名前はアイリーン・シェイラーというところまではわからなかった。

「砂糖は？」とアンジェロは尋ねた。

「結構です。どうもありがとう、ルンギさん」と彼女は言った。

アンジェロは、マグカップを三つ窓辺の背の低いテーブルのところまで運んで言った。「ビスケッツは？」

「いえ、結構です。どうもありがとう」とシェイラー夫人は言いつて続けた。「仕事の話をしてかまいませんか？」

「もちろん」とアンジェロはソファに――ジーナの横に坐つて言つた。

「実は主人のことなんです」とシェイラー夫人は言つた。

「ジャックの」そう言つて彼女は身を乗り出し、ジーナがメモにその名前を書き込むのをのぞき込んだ。「きつと何か面倒なことになってるんです。わたしにはわかるんです」

「どうしてそう思うんです？」とアンジェロは尋ねた。

「洗剤のことがあるから」とシェイラー夫人は答えた。

「洗剤」とアンジェロはおうむ返しにつぶやいた。ジーナは何も書かなかつた。

「今朝も洗剤の容器がシンクの横に、わたしが置いたままのところにあつたんです」

「それがどうして重要なことなのか、説明してもらえます

？」とジーナが言つた。

「ゆうべ洗いのものと、わたしは洗剤をシンクの右側に置きました。小さなスペースなんですけど、レンジとシンクのあいだにちよつとしたスペースがあるんです」

「なるほど」とアンジェロ。

「わたしもジャックも右利きだから、何か食べものをつくるときにはいつもその右側のスペースを使います」そう言つてシェイラー夫人は少し間を取り、次のことばを意味ありげにつけ加えた。「あるいは、何か飲みものをつくるときにはいつも」

「なるほど」とアンジェロ。

「ゆうべは十時頃寝ました。だいたいいつもそれくらいにベッドにはいるんです、テレビでスヌーカー（白の手玉一個落とす玉突き）をやつてないときには。スヌーカーをやつてるときには十一時か十一時半頃まで起きてますけど」

「でも、ゆうべは十時にはベッドにはいった」とアンジェロ。

「ジャックがベッドにはいったのは十時四十五分です」

「それはだいたいいつもの時間なんですか？」とジーナ。
「ええ。彼はニュースを見ますから。わたしは読書です。
スヌーカーがあるときには読みませんけど。だってジャックがもうベッドの中にいるのに読むのは、彼に悪いでしょ？　そう、ジャックもベッドで雑誌なんかは読みますけど、でも、それは数分のことです。読書とは言えません。本じゃないんだから。わたしは本を読みます」シェイラー夫人はまた身を乗り出して言った。「大丈夫ですか？　わたしの話、速すぎませんか？」

「大丈夫です」とジーナ。

「ジャックにはもうひとつくせがあつて」とシェイラー夫人は続けた。「ベッドにはいるまえに必ず何か温かい飲みものをつくるんです、必ず」

「要するに」とアンジェロが言った。「ゆうべは十時にベッドにはいったということは、ゆうべはスヌーカーがなかったということですね？」

「そうです。ゆうべはごく普通の夜でした。ただ……」と言つてシェイラー夫人は指を一本立てた。「今朝になつて

普通の夜ではなかったことがわかつたんです」

「今朝になつて何がわかつたんです？」とジーナが尋ねた。「まずさきに説明しておきますと」とシェイラー夫人は言つた。「朝はわたしのほうがジャックよりさきに起きます。眼を覚ますのはだいたい同じなんです。主人はそのあともしばらくベッドにいるんです。そうやってその日やることを頭の中で整理するんだそうです。わたしのほうはさきに起きて紅茶をいれます」

「で、今朝は？」とアンジェロ。

「いづれどおり紅茶をいれました。そしてそのときわかつたわけです。洗剤がシンクの右側に置いてあるのが。ゆうべわたしが置いたままになつてゐるのが」そう言つてシェイラー夫人は椅子の背にもたれ、マグカップを口まで持つていった。そして飲むまえに、今朝彼女が発見したことの重大さにアンダーラインを引くかのように、こくりとひとつ大袈裟にうなずいてみせた。

それに合わせてアンジェロとジーナも紅茶に口をつけた。アンジェロはビスケットまで食べた。